

1 研究主題

情報活用の実践力向上を目指すカリキュラムと評価の開発
～石金夢の森公園を核とした題材を通して～

2 主題設定の趣旨

今日のように急速に進んだ情報通信社会と私たちは否応なしに向き合わなければならなくなってきた。それは学校も例外ではない。このような状況に対応し、新しい時代を支えるために必要な能力や態度の育成が学校教育において求められていると考える。つまり、自ら課題を見つけ、自ら考え主体的に判断したり行動したりし、よりよく解決していく資質や能力を育成することがわたしたちに求められているのである。そのためには、あふれる情報の中から本当に必要な情報を集めたり理解したりし、主体的に自分の考えを構築していくこと、また、相手に応じて自分の思いを効果的に伝えることの育成が必要である。それが総合的な判断力や思考力を育成し、子供たち自身が自己の生き方について考えることにつながるものであると考える。

本校は平成9年度より富山市都市開発部公園緑地課と連携し、住民参加型のワークショップの手法を取り入れながら、「石金夢の森公園」を設計する活動に取り組んできた。そのため、子供たちは日常的に情報を地域や関係機関に対して求めたりはたらきかけたりする体験的な学習を行っている。このような学習には、児童が情報や情報手段を扱う場面は多く存在していた。しかし、わたしたち教師の側に情報活用の実践力を育成する明確な規準をもたなかった。本研究では、情報活用の実践力の段階を明らかにし、「石金夢の森公園」を核とした体験的な年間カリキュラムの中に位置づける。また、評価項目を作成し、児童の自己評価、相互評価、教師による評価を組み合わせながら、情報活用の実践力の向上を把握し、次なる学習活動に役立てる手だてとしていくこととする。

3 研究内容与方法

- (1) 本校がこれまで行ってきた体験的な学習において、児童に求めてきた情報活用の実践力とその力とそのレベルについて整理する。
- (2) 整理した結果をもとに情報活用の実践力の段階表を作成する。
- (3) 地域住民や関係機関、遠隔地の学校との情報交換交流を目的とした、授業をデザインし、体験的な学習を実施する。(生活科、総合的な学習の時間において)
- (4) これらの学習活動の中で、児童の活動があらかじめ作成した目標リストを満足しているかどうかについて評価する。具体的には、児童による自己評価・相互評価と教師による観察をチェックリストなどを用い、個々の児童の向上を把握し、これに基づいて次の学習指導を改善し、再設計する。

実施の手順として、まず育成したい情報活用の実践力を各学年で明らかにし、次に各学年のテーマの中でそれが育成されるような単元を開発し、実践する。その際に、その単元での各場面で育てたい力が育成されたかどうかの把握に努め、チェックリストに書き込んでいき、不足している場合は次の活動で補っていくことにする。

評価は子供が自信をもったり励みになったりするものであり、教師にとっては自分の行った単元の見直しのために行うものである。意味なくふり返りカードを書くことを子供に強いるのではなく、また、教師も常にそれのみにとらわれて苦になるものでは、継続は難しい。そのため、これまで同様の教師との対話等からの実態把握や励ましも重要なことであり、子供たちの様子を把握するための大切な評価と考えて実践にあたる。

4 研究の組織について

2年間にわたって本研究を進めるにあたり部会組織は学年部会を中心としつつも、評価研究部会と学習環境研究部会を組織した。

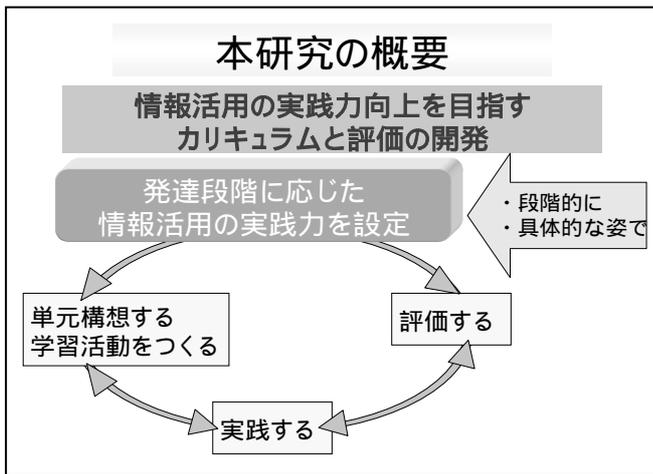


図 4.1 研究の概要

このようにしながら、学習活動のどの場面でどのような評価方法が適切であるかを研究する。

(2) 学習環境研究部会

準備段階での話し合いをもとに子どもたちが情報を活用しやすい環境に整備し直した。子どもたちが主体的に学習を進めるためには、より使いやすい環境整備が必要である。本校はこれまでも図書室をチャレンジセンター（調査のための資料が充実した部屋）とよみよみランド（物語の世界に浸る部屋）に分けてきた。しかし、総合的な学習の時間においては、子供たちが一斉に図書資料で調べたりインターネットで検索したりすることは少ない。調べたり、発信したり、話し合いをしたりと言うことが同時に進行することが多い。そのために、これまでのコンピュータ室横の家庭科室をふれあい情報センターとして、これらの学習に対応できるように整備を行った。

具体的には、下記の(1)～(7)のような整備を実施した。

- (1)インターネットとテレビ会議を同時にできる環境にする。（ADSL回線取得）
- (2)情報の収集・発信とその他の学習活動が一体化されるような空間を考える。（ふれあい情報センター、児童の学習用電話機・FAX機設置、テレビ電話コーナー）
- (3)地域人材や各関係機関の連絡先を、子供がわかって使えるようにする。（地域コーナー）
- (4)総合的な学習の時間に活用しやすい図書資料をふれあい情報センターに配置
- (5)インターネットによる交流掲示板、保護者メーリングリストを立ち上げ学習で利用しやすくする。
- (6)テーマに基づく学習のホームページ作成。
- (7)情報教育への保護者の意識を把握と1年後2年後の意識を把握して変容を調査。

(2)に関して、子ども用の電話・FAX機を設置し、子どもたちに自由に使うことについて、導入当初は教師の抵抗もあった。しかし、各学級での適切な学習指導を行うことで、混乱や問題は生じていない。石金夢の森公園の活動は子供たちが一番よく通る場所に掲示し、常に意識することができるようにした。

(4)に関しては、環境・福祉・ボランティア・国際などの総合的な学習の時間に必要な図書資料を図書室から移動した。また、富山県内の地域資料を市・郡別にファイリングしておくことで使いやすくなった。

具体的には、図4.2～図4.7のようなものである。



図 4.2 地域の先生紹介・校区のマップ



図 4.3 県内・市内の施設



図 4.4 子供用のFAX



図 4.5 必要資料の整理・ファイリング



図 4.6 学習活動の経過の廊下掲示(1)



図 4.7 学習活動の経過の廊下掲示(2)

5 保護者への意識調査の結果

本校では、これまでも地域に関する体験的な学習を行っているが、情報活用実践力を向上させていくためには、さらに保護者の理解を得る必要があると考えた。情報教育という言葉だけで単に子どもがコンピュータに向かっていることではないかと危惧することも考えられたからである。（13年度当初）

そこで、13年度と14年度当初のPTA総会の折に保護者への説明を行った。また、実践の前と1年間経過後とに保護者の意識調査を行った。アンケートの回収率は、平成13年度65%、平成14年度は91%であった。

A：家庭のインターネット接続率

家庭のインターネット接続率は少しずつ上昇している。現在は約7割の接続の環境にある。

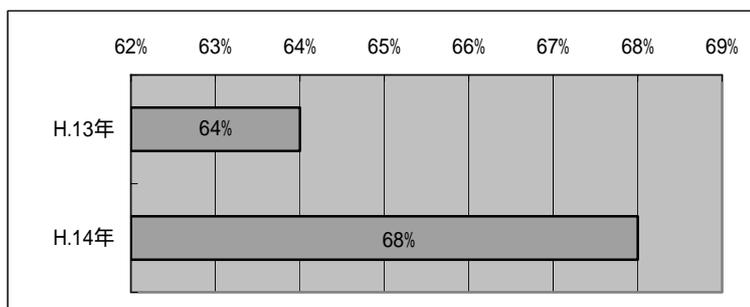


図 5.1 家庭でのインターネット接続率

B：小学校段階から情報教育を行うことについて保護者はどう考えるか。

平成13年度当初には、情報教育を行うことに抵抗を感じている保護者が多かった。しかし、14年度には保護者の不安は減少している。

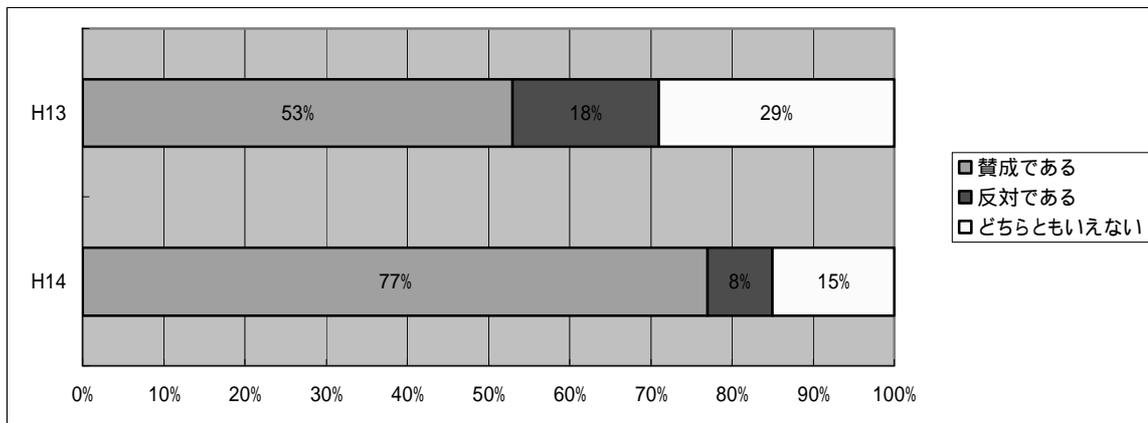


図 5.2 小学校での情報教育実施に対する保護者の考え

このような変化が起きた要因の一つとして、保護者の不安を取り除くための下記の(1)から(3)のような活動を実施したことが影響していると考えられる。

(1) 保護者への説明

4月のPTA総会で学校の考える情報教育についての説明を行う。この際に具体的にわかりやすい子どもの姿で伝える。また、1年後の育成できた結果をホームページ上に公開することを約束する。

その後の学級懇談会で担任が1年間の構想をさらに具体的に話し、理解を求める。

各学年での学習活動を含む年間構想と育成したい力を年度当初に、年度末にその結果をホームページ上にのせる。 <http://www.tym.ed.jp/sc109/14kenkyu/tangen/tanhyo.htm>

(2) 地域にはたらきかける体験的な学習の展開の継続



図 5.3 子どもたちの取材の様子

この学習の中では、地域の人々に取材を行い、必要な機関に情報を求める必要が多くなる。地域に情報を求めることで多くの人が学習の様子を知ることとなる。このような学習活動の継続が、地域や保護者の理解を得ることにつながる。たとえば、3年生の「見つけた、東部の秘密大発見 - 道探検 - 」では、子どもたちが自分たちで取材の約束を取り付け、取材を行った。その際教師は取材先に評価カードの記入を依頼する。評価カードには学習させたいことを明記しているため、何を教えればよいか地域の人にもよくわかり、記入しやすい。学校の求めていることを協力者にきちんと伝えることにより、学習の内容、意図の理解を得ることにつながる。保護者だけでなく地域社会にも学校の目指すことへの理解を生んだ。

(3) 学校メールマガジンと保護者メーリングリストの活用

・学校メールマガジン

学校の様子をタイムリーに保護者に知らせる学校便りを希望者の家庭にE-mailで毎月配信した。学習の様子だけでなく、その学習の持つ意味情報教育としての意味、担任の願いなどを具体的に分かりやすく表記し、配信する。また、このような情報発信の手段があることを子どもにも知らせておく。子どもでも必要なときに原稿を担当者に渡せば伝達することが可能になる。

13年度当初の配信希望者は60名程度であったが、現在は保護者だけでなく、地域や関係機関の人々を含めて200名近い希望者がいる。返信は、学校の担当者だけに届くため、安心して感想などを返信できる。企画当初には返信があることを予測していなかったが、現在は必ず返信がある。

・保護者メーリングリスト

これは子どもたちが地域に情報を求め取材する際に、訪問しても日中に在宅する大人は老人が多い。そのために、その他の方々からの情報を得たいときに使うことができるように、学年にアドレスを割り振っておき子どもたちに利用できるようにする。現在は50名の方が子どもの取材先として登録されている。このMLについては、4年生の段階で指導を行った。13年度は多い学年では1単元の中でのメールのやりとりは20数回に上ったが、14年度は多い学年でも10回ほどであった。この利用数の減少は、MLを意識した学習展開が少なかったことが考えられる。また、このMLだけでなく多様な情報収集手段があるため、徐々に必要な機関に自分から情報を求めていくことが多くなったと考えている。学習環境として様々に整備されている中から目的に応じて選択している子どもの姿が見える。

C . 学校の教育活動へのサポートについての意識

このアンケートから分かるように学校教育への関心は非常に高まっていると感じる。アンケート回収率が飛躍的にのびたことや教育活動への参加を表明する保護者が増加していることは、教育活動をサポートしようとする保護者の意識の向上が感じられる。

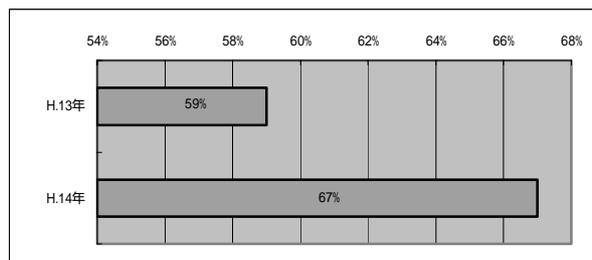
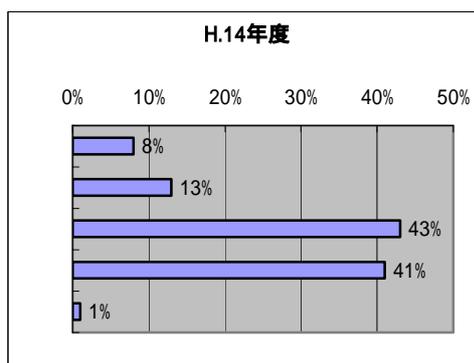
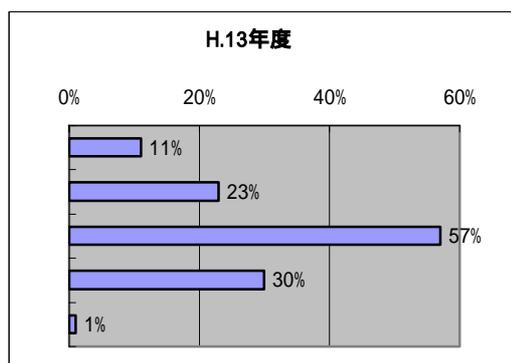


図 5.4 学校の教育活動へのサポートについての意識

D. 子どもたちの学習についてどのような方法でアドバイスすることができるか。(複数解答可)



学校に出向いて
手紙などで
子どもを通じて
インターネットで
その他

図 5.5 H.13年度アドバイスの方法

図 5.6 H.14年度アドバイスの方法

保護者だけでなく、地域社会全体にかかわる学習を展開することが学校の教育への関心を高め、参画への意識を高めているものと考え。その中でインターネット接続率が7割近い環境を生かしてのサポートを申し出る保護者が増加したことは、学校での子どもたちの学習が子どもを通して反映していると考え。また、学校メールマガジンや保護者メーリングリストなどの整備が便利な道具として意識されていることもあろう。しかしアンケートには下記のような反応もあるため、理解を得られるように継続していきたいと考える。

- 子どもたちがコンピュータにばかり向かっては心配です。のびのびと戸外にも目を向けた学習を望んでいます。(H13)
- 小学校からコンピュータをさわする必要は感じない。自分の手でしっかりと字を書き、声に出して読むことが大事ではないか。(H13)
- インターネットで調べることを宿題に出されると我が家は何もないのでそんなことは絶対にしないでください。(H13)
- 現代に必要なことであると考えている。その中で必要なことをきちんと身につけるような指導をしてほしい(H14)
- どうなるのだろうか心配しながら息子を見ていましたが、いろんな場所に行ってときどきながら取材してきたと言う子どもの話を聞いて、先生の考えがよく分かりうれしくなりました。いろんな体験をさせてくださることをうれしく思います。(H14)

6 カリキュラムについて

本校では総合的な学習の時間において情報スキルと情報活用の実践力とを分けて指導計画を作成している。平成13年度、14年度においてそれぞれ下記のように学年毎にテーマを設定した。テーマ設定の目的は、本テーマに基づく学習を、単なるスキル学習ではなく子供が目的を持った意味ある活動にしたいと考えるからである。しかしながら基本的な技能は全員がきちんと身につけることができるようにすることが必要であると考え、スキルの年間指導計画を作成して指導にあたる。平成13年度はコンピュータ支援講師とともに担任が、平成14年度からは担任が指導にあたった。各年度の単元構想は、学校のホームページで公開している。

平成13年度単元構想 <http://www.tym.ed.jp/sc109/kenkyu/ken04.htm>

平成14年度単元構想 <http://www.tym.ed.jp/sc109/14kenkyu/tangen/tanhyo.htm>

表 6.1 平成13年度、14年度の学年毎の学習テーマ

平成13年度				平成14年度			
学年	テーマ	領域	時間数	学年	テーマ	領域	時間数
1	なかよしいっぱい	人・自然	97	1	なかよし大作戦・秋と遊ぼう	人・自然	20
2	飛び出せチャレンジャー	人・自然	97	2	飛び出せ探検隊・遊びの基地作り	人・自然	20
3	すきすき東部大発見	人・地域	71	3	見つけた東部の秘密大発見 - 道探検 -	人・地域	71
4	レッツチャレンジふれあいパーク	人・地域	40	4	笑顔いっぱいふれあい東部	人・地域	62
5	広げよう東部きときとネットワーク	環境・情報	73	5	東部エコチャレンジャー 私たちのまちへGO	環境・情報	75
6	21世紀私たちの手で笑顔が輝く東部のまちへ	ボランティア・福祉	80	6	共に生きる～広げよう東部スマイルネットワーク～	ボランティア・福祉	68

14年度は、低学年では生活科の一部の単元だけに絞って行った。これは、生活科は教科としてねらいが明確に設定されており、総合的な学習の時間の本校での育てたい力をそのまま低学年用とするには無理があると考えたからである。

2年間の各学年のテーマを比較するとほぼ同様なテーマである。これは学校の年間カリキュラムとして位置付けているからである。子どもたちと十分な話し合いをして展開するので、テーマ名が少し変わる。また、育てたい力や学習内容、体験などは学年でほぼ固定することになる。このことにより6年間で育成できる学力や体験が明確になるとともに確実に力が育成できることが学校としてのカリキュラムの大きなメリットであると考えている。そのほかに、教師もその系統性や段階を熟知することになる。それは教科と同様に、子どもの実態に合わせて柔軟に変化させながら展開していくことが可能となる。また、教師だけでなく子どもも保護者も大筋での学習がある程度予想できることになる。

しかし、これらを行っていくためには、子どもたちが本気になって課題解決に向かうための、出合わせ方や展開の工夫が必要となる。カリキュラム化したために教師がマンネリ化し、子どもたちも「させられている」ということを感じない展開が必要なことは、教科と同様に言うまでもないことである。

(1) 各学年のテーマについて

低学年の生活科で地域の人・自然・事象との十分なかかわりを持つことができるようにする。その中での1単元を開発単元とし、情報活用の実践力の向上を目指す。**実物投影機やデジタルカメラを教師が学習の中で使うことからはじめ、その便利さを体感させる。**

3年生では、低学年の生活科の学習を生かし「道」という焦点化されたテーマで行いつつ、**必要な情報を得るために基本的な取材の仕方を学び、それを生かしさらに学習を商店街へと広げる。**

4年生では、道からまちへと広がった子どもたちの意識を生かし、東部のまちの人の心を結びつけるイベントの企画実践を行う。この中で**情報の収集や伝達手段の効果と意味を知り自分の活動に生かす。**

5年生では、環境という視点で自分の周囲から問題を発見し解決する学習であるが、ここでは科学的に、総合的に考え判断する力の育成に力を入れる。そのために多様な情報収集や発信、専門家との出会いなどをうまく活用し学習を深めるようにする。またそれを**適切な手段で発信する方法としてコンピュータによるプレゼンテーションを利用する体験を組み込む**

6年生では3～5年生での全ての学習体験を生かし、「まちづくり」という視点で自分のまちを見直し**必要なことを実践しながら発信する。環境・福祉・ボランティアなどの視点を盛り込んだ学習にする。メディアを十分に活用する。**

以上のように各学年のテーマがあるが、各学年が大単元構想で実践している。大単元では子どもの意識の継続が難しい。そのため、「調べてまとめて伝える」という総合的な学習の時間の流れを考えながらも、20時間程度の小単元の継続で各学年のテーマに迫るように平成15年度は見直しを図りたいと考える。

(2) カリキュラムについての教師の意識

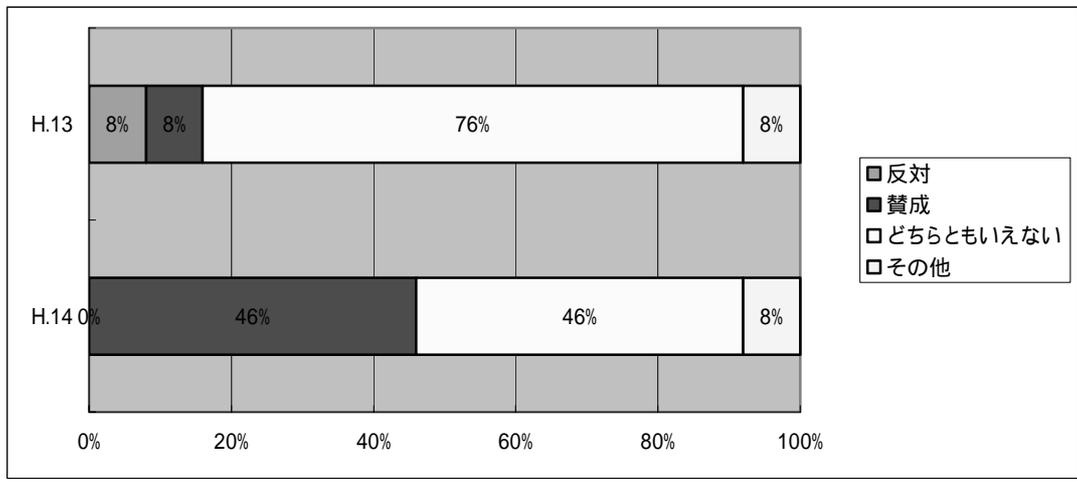
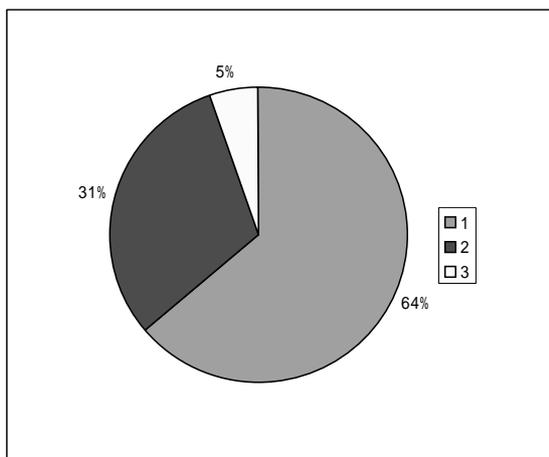


図 6.1 情報活用の実践力の向上を目指すための、総合的な学習の時間の学習の学校カリキュラム作成に関する教師の意識

本校教師への2年間の意識調査から、教師の意識変容が分かる。学習のねらいも内容も学校が独自に決めて行う総合的な学習において、準備段階においては、学校としてのカリキュラムを作成することにやや抵抗があった。それは、「総合的な学習の時間は子どもとともに自由なことを行う時間」という誤解があったように思う。育てたい力と体験の段階・系統性の必要に教師自らが気づいていった2年間であったと感じている。学校全体で取り組むからこそ向上する子どもたちの情報活用に実践力の向上が教師に実感できたからではないだろうか。

(3) カリキュラムについての子どもの意識

6年生の発表を聞いて自分も取り組んでみたいと思いませんか。



- 1 : 取り組んでみたい
- 2 : 少し取り組んでみたいと思う。
- 3 : あまり取り組みたいとは思わない。

図 6.2 子どもの意識

本校では1年間の学習の取り組みを下級生に伝える場を持っている。学習の中では適宜必要な相手や機関に対して伝えたりはたらきかけたりしてきている。しかし、この3学期の伝える場をもつことで子どもたちは自分の取り組みを客観視するとともに下学年に引き継いでもらうための効果的な伝え方を学ぶこととなる。またこの伝える場は、学校のカリキュラム作成という面で子どもにとっては意味ある場となる。平成13年度の3学期に6年生が5年生に伝える場を持ったときのアンケートである。アンケートから子供同士の伝える場は、翌年の子どもの学習テーマへの意識に大き

く関与していることがわかる。子どもたちは前年度の6年生の発表を聞いているが、それをさらに発展させていきたいと考えているのである。

現在の自分の取り組みは昨年度の6年生の取り組みと似ているところや共通点があると思いますか。

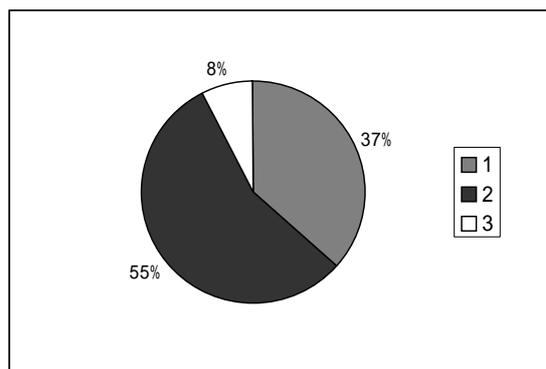


図 6.3 自分の取り組みについての考え

- 1：昨年度の6年生よりさらに活動を発展させている。
 2：同じような活動や願いとしては、共通している活動に取り組んでいる。
 3：全く異なった活動をしている。

平成13年度と14年度の6学年のプロジェクトを載せるが、一見似ている。しかし、子どもたちの中ではさらに発展させていきたいという願いを持っておりこれは年度当初のスタートがしやすいというメリットがある。この伝え合う場をもつことはカリキュラム化していく上で有効であると考えられる。

平成13年度6学年	平成14年度6学年
・シルバースマイルプロジェクト	・お年寄りにここプロジェクト
・スマイル病院	・スマイルホスピタル
・きれいきれいプロジェクト	・リサイクル・ゴミ減らし隊
・保育所交流	・ジュニアスマイルプロジェクト
・ふれあいクラブ	・石金夢の森公園活性化プロジェクト
・商店街活性化	
・フラワープロジェクト	・フラワースマイルプロジェクト
・Yさんとの交流(障害のある人)	
・生き物プロジェクト	・夢森生き物増やし隊

7 評価について

本研究では、情報活用の実践力の段階を明らかにし、それを「石金夢の森公園」を核とした地域に関する体験的な学習の中に埋め込むことにした。これまでの体験的な学習の中で育った力を洗い出し、そこに情報教育の視点を埋め込む。そして総合的な学習の時間と生活科の年間カリキュラムの中に育てたい力を系統的に設定し、それが育成されるような実践をするのである。

平成13年度には育成する力には、情報の収集、処理、発信の仕方や技能だけではなく、心豊かに人間関係を作るといった視点からの目標も取り入れた。

(<http://www.tym.ed.jp/sc109/kenkyu/ken05.htm>)

情報活用の実践力を育てるためにメディアを通して交流学习をしたら、たまたま相手と心の通うつながりができたというのではなく、初めから両者を目標として指導していくためである。そして、人とのかかわりが実際にふれ合うことであろうと、情報機器を媒体としてのやりとりであろうと、同じように相手を意識し、相手の立場や気持ちを考えられる子供、状況に応じて最も有効と判断した情報手段を用いながら、双方向の温かな関係を作り上げていくことのできる子供を育てることを目指す。

14年度は、前年度の反省をもとに年度当初に段階表を見直したが、それが一般化されすぎていたために教師が具体的な目指す子どもの姿を描きにくくなってしまったため、3～6学年までを再考し、途中で変更を行った。情報活用の実践力を段階的かつ具体的な子どもの姿でイメージできないということはねらいが不明確であるということである。それは、子どもの学習の混乱を生むことにつながる。この見直しの必要性は、実践している担任からの要望で行ったものである。下記に一例として3学年の育成したい力を示す。他の学年も同様な表を作成している。これをもとに、学校の育てたい力としてそれが育成できるように学習を展開する。下記の評価の欄には、実践後どの程度育成されたかについての結果を記入しホームページ上に載せることで年度当初の

説明責任に対応する結果責任としている。

表 7.1 3年生で育てたい力、情報活用の実践力（平成14年度見直し版）

	目指す子どもの姿	評価	育てたい力
課題設定の力	道探検を通して、不思議なことや疑問に感じたことを見つける。 道探検で見つけた不思議なことや疑問に感じたことから、これから追究したい課題をもつ。		<ul style="list-style-type: none"> 道探検を通して物・施設・事象・人などから不思議なことや疑問に感じることを見つける。 道探検で得た多くの情報の中から自分の関心のあることをはっきりさせる。 友だちとの情報交換から、様々な疑問や見つけたことが他にもあることに気づく。 道にある物や施設・事象や人々の様子から知りたいことを明らかにしてさらに探検したり情報収集したりする。
問題解決の力	自分の知りたいことや疑問を解決する。 インタビュー活動を通して、集めた情報に自分なりの考えをもつ。		<ul style="list-style-type: none"> 課題解決のための情報収集の方法について考える。 身近なところから情報を集める。・相手にきちんと挨拶して話を聞く。 相手の目を見てきちんと話を聞く。 相手の状況を考えて話を聞くことができるか判断する。 自分の聞きたいことが相手に伝わるように尋ねる。 インタビューを通して分かったことを友だちと情報交換し、多用な考えがあることに考えがあることに気づく。 インタビュー活動を通して集めた情報の中から東部の町についての自分の考えを持つ。
まとめて伝える力	道探検からわかったことや考えたことを友だちや町の人に知らせるための自分の方法を明らかにする。 自分の考えた方法で伝える。		<ul style="list-style-type: none"> 道探検で分かったこと・見つけたことをみんなの前で話す。 誰に何を伝えるのか明確にする。 自分が伝えたい東部のまちの姿や地域の人々の気持ちについて確認する。 伝える相手によって伝え方を変えることの効果を理解し、表現に生かす。 <ul style="list-style-type: none"> 大きな声で ・ゆっくり ・字の大きさ・配列 立つ位置 ・視線・動作 ・紙面での表し方
自分を振り返る力	自分の活動を振り返り、できたことやできなかったことをみつめる。 自分の考えを見直し、さらに変化したこと気づく。		<ul style="list-style-type: none"> 友だちの見つけたことを自分と比べ、見直す。 友だちのインタビューの仕方からよさを見つける。 自分の表現活動について話し方や紙面への表し方、演技の仕方を振り返る。 学習を振り返り変化に気づく。

前述の情報活用に実践力の向上を目指す全学年での実践の中から6学年の事例をもとに評価について述べる。

(1) 6学年・総合的な学習の時間「21世紀、わたしたちの手で笑顔の輝くまちへ」の実践と評価

実践の中でどのように情報活用の実践力を身に付けようと試みたかを述べる。

育てたい力を設定する。

手順1

学校の育成したい力をもとに、子供の発達段階と実態とを照らし合わせながら「単元で育てたい力」を設定する。

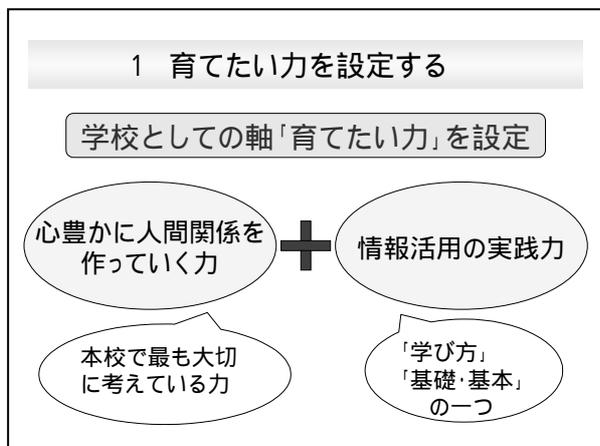
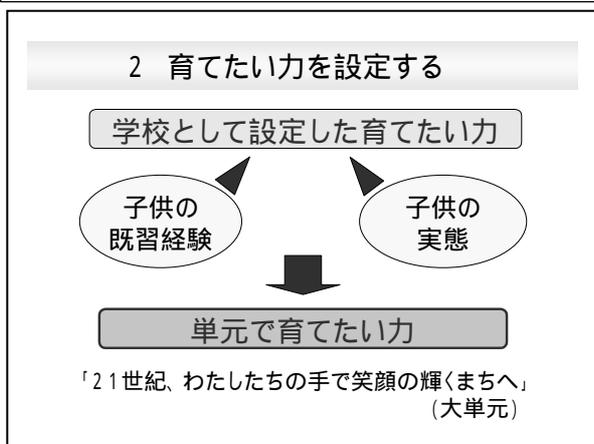


図 7.1 学校としての育てたい力の設定

本校の育成したい力は、はじめはどの単元にも対応できるよう抽象的なレベルで考えたものである。そこで、単元を構想する段階で、6学年という発達段階や昨年度までの既習経験を考慮しながら、単元で育てたい力を具体的に設定する。例えば、学校で設定した目標が「他の人の情報をもとに、自分の情報を改善する」であれば、単元全体を見通して、子供たちが体験できる活動を想定しながら「集めた情報をもとに、地域や活動の状況に適応していく情報を作り出す」「交流校や専門家などから得られた情報のよい点を活動に取り入れる」といったように具体的に設定する。

手順 2

手順 1 で設定した単元で育てたい力をもとに、「活動場面ごとに育てたい力」を設定する。



時間をかけた大単元になると、そこにはたくさんの活動が組み込まれてくる。そこで、単元で育てたい力を踏まえて、活動ごとのステップで、さらに付けたい力を具体的に設定する。単元で設定したにもかかわらず、活動レベルでもう一度設定するのは、以下の理由である。

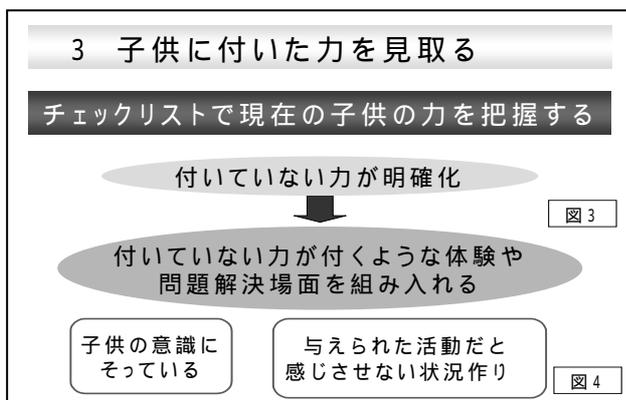
・単元でねらいを設定しても、子供の意志によって探究過程が変化したり、教師が意図的に新たな活動を取り入れたりし、初めに想定していた単元構想に変更が生じてくる。学習状況の変化に柔軟に対応するため、活動の変化にともなって育てたい力の見直しが必要になる。また、全員が同じ活動を行うわけではなく、プロジェクト(課題)ごとに体験する活動もまちまちであるため、それぞれ

図 7.2 単元で育てたい力の設定

れに付けたい力を設定する必要があるからである。

育てたい力を手順 1・2 のように段階を踏んで細かく設定するのは、教科の目標が「領域の目標 単元の目標 小単元の目標」といったようにステップを踏んで設定されているのと同じ考えによるものである。

子どもに付けたい力を意識させる。



子供に付けたい力を意識させるには、活動場面での育てたい力を教師と子供が共有していかなければならないと考える。ねらいを共有することで、子供により力を付けることができるのではないかと考えた。

図 7.3 活動の評価

手順 1

短時間で書ける自己評価カードを作成し、継続的に自己評価を行う時間を設けることで、子供に次の活動の見通しを持てるようにする。

カードを作成するにあたって、次の点を工夫した。

【自己評価カード作成にあたっての工夫点】

- ・最初に、活動への見通しを持ち、なりたい自分やつけたい力を意識できるような項目を作る。この項目は、活動の意義を自覚し、意欲を高めることをねらう。1回の評価で記入する項目は「付けたい力を意識させる」という視点で精選した。各項目は短い言葉で、活動のねらいに対する評価は1から5の数字で表すことで、短時間で自己評価できるようにする。評価に時間がかかりすぎると評価活動や活動そのものへの子供たちの意欲をそいでしまうと考えた。
- ・ねらいに対して自分はどうかを振り返ることができる項目を設ける。この振り返りを継続的に行うことで、自分を客観的に見つめる習慣を身に付けることをねらう。

手順 2

振り返りカードに子供が書き込んだねらいやその結果について、個々に対話し、授業後一斉に話し合ったりすることで、子供自身が付けたい力を意識できるようにする。それを目標として取り組むことで、より情報活用の実践力を付けていけるようにする。

子供に「めあて意識」をきちんと持たせることは、教師が育成したい力を意識させることになる。しかし、子供自身、次の活動は見えても自分にどんな力を付けたいのかわからないのが現状であるので、自己評価カードのめあての持ち方に対して指導が必要になる。

- ・ しっかり集中する。
- ・ フナについてたくさん調べる。
- ・ 交流の内容を決める。

全く子ども自身には教師ののぞむ力は意識されておらず、活動内容や授業態度についてのみ記述している。そこで、子供たちがめあてを書き終わった後、今日の活動で何をめあてにするのかを個々に対話するようにした。その結果、次のようなめあてに変化してきた。

- ・ 役所の方にわかりやすく伝えられるようにする。
- ・ 次の活動を決めるので、自分の考えを積極的に言う。
- ・ グループのみんなの役割分担をしっかりとる。

活動内容ではなくなっているものの、まだ「わかりやすく」「積極的」「しっかり」などの抽象的な言葉が使われている。抽象的な言葉では、子供は実際どうするのがわからず、結局行動に移すことができない。

そこで、めあてを具体的に持てない子供との対話も続けながら、授業後、めあてとその結果を発表する場を設けることにした。友だちが、具体的なめあてに向かって努力している姿や、めあてに対して客観的に振り返っている姿から自分を振り返り、次第に目標を明確に持つようになってきた。発表の場を繰り返すことで、次のようなめあてを書く子供が増えた。

- ・ 白石さん（動物園職員）に土を入れたい気持ちが伝わるように、資料や自分の考えを入れてレポートを書く。
- ・ 早瀬さん（地域商店街の方）の目を見て話したり、実物を見せたりして、フェスティバルのねらいや願いを分かってもらえるようにする。

活動場面に応じ具体的に、伝える相手、めあてとする話し方や表現の仕方などをはっきりと記述している。具体的に書けるようになることで、子供は実際の行動へと移すことができる。このようにすることで、活動場面ごとにめあてを子供自身が意識できるようになってくると考える。

子供たちは、自己評価活動をどのようにとらえているのだろうか。

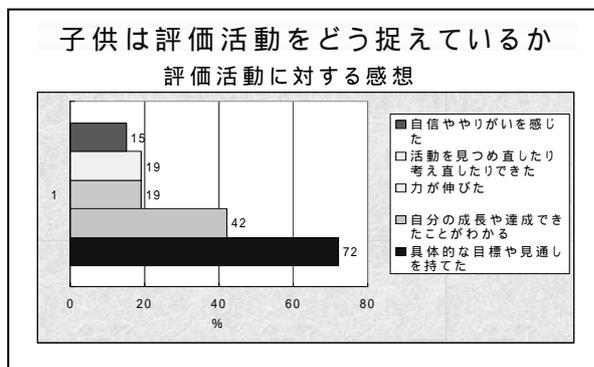


図 7.4 評価活動に対する子どもの感想

このグラフからわかるように、活動の目標や見通しが持てたと感じている子供が多い。この結果から評価カードの活用は以下のように子供に有効にはたらいたと考える。

付けたい力を子どもが自分で認識できる。

めあてを達成しようとする営みが情報活用の実践力育成を促進する。

振り返ることが役立つという認識を子どもがもつことができる。

子供に付いた力を見取る

手順 1

活動場面ごとに、どんな方法で子供を見取ったかを記録に残していく。

評価方法の模索段階であるため、どんな場面で子どもの何を見取っているかをできる限り詳細に記録に残すことにする。今まで行ってきた直観的な評価を、具体で記述することで規則性や汎用性を探り、より確かな見取りができるように試みる。

手順 2

単元で育てたい力をチェックリストにし、子供に付いた力や付いていない力を把握する。その結果を見て、付いていない力が付くような活動が体験できるように、柔軟に単元構想を作りかえていく。

(1)の手順 で設定した「単元で育てたい力」で、個人別チェックリストを作成する。チェックリストを用いて、子供たちが5時間から10時間のひとまとまりの活動を終えた後、記入する。その結果、活動の内容によって明らかに付いた力と付いていない力が分かる。**チェックリスト1 (巻末資料1: 20時間後のチェックリスト)**は単元開始20時間経過した生き物プロジェクトのものであるが、まだ、「メディアを利用して意見交換を行い、自分の追究に生かす」「情報の活用方法を考えながら収集する」などといった力が付いていないことがわかる。

そこで、まだ付いていない力を意図的に付けるために、子供の意識の流れにそった必要感のある活動を意図的に組み入れて、柔軟に単元を変更していくことにする。ここで配慮しなければいけないのは、教師から与えられた活動だと子供に感じさせず、その活動を行わなければならない状況を作ることである。その結果、55時間経過したチェックリストの記録**チェックリスト2 (巻末資料2: 55時間後のチェックリスト)**は、かなりめざす力が付いてきているととらえる。このチェックリストを利用することで、教師は子供にまだ付いていない力を把握し、その力を付けるような支援を意図的に行うことで、情報活用の実践力を培うことができると考える。チェックリストは巻末資料のように記述する場合と下記のような記号で記す場合がある。

80%以上達成 60%以上達成 60%未満	自分の活動の目的を考え、必要な情報を集める。	交流校や専門家から得られた情報のよい点を活動に取り入れる。	問題解決に必要な内容を情報機器の活用により記録していく。	情報や体験から自分なりの考えや新しい課題をもつ。	伝えたいことを明確にして相手や目的を考えて伝える。
A児					
B児					
C児					
D児					

表7.2 チェックリスト

担任は観察や子どもの相互評価や自己評価などのワークシートなどからチェックリストに書き込み、把握し単元を柔軟に変化させていくのである。

(2) 平成13年度の3学年の実践から

下記に平成13年度と14年度の3学年の育成したい力をのせるが、この表記に教師の意識の変容が分

かる。平成13年度は育成したい力の中に心情面での育成も含めてはじめて両方をねらいとして単元を構想していた。しかしこれは育成したい力を具体的な子どもの姿として描きにくいことに教師自身が実践を通して気づく。具体的な姿を描けないと言うことはそのための支援や指導も何が適切なかが不明確となる。活動の過程では子どもは人とかかわることに喜びを感じ生き生きと活動する。しかしそれは単なる体験でしかない。体験はしないよりもした方がよいが、その過程で何がどれだけ育ったのかを見取り、それはどのような指導や支援によるのかを明確にしていくことが必要なのである。教師は結果として育成できた力を分析しようとしたときに、曖昧であることに気づいていった。そして平成14年度当初に一度見直した一般化された言葉を年度の途中で自ら再考する動きへと高まっていった。

下記資料1の太線で結んだ箇所を比較すると具体的な学習活動を想定しての子どもの姿を描くことができる14年度であることが分かる。3学年では取材するための基本的な指導を行う学年とし、それが達成できるように学習を展開する。グループでの道探検では、取材する子どもは特定の子どもになりがちであるために二人1組となり、取材活動を評価させる。また、取材先の人にも評価をもらう。本人の自己評価カードとそれらを子ども自身に比較させる場を通して子どもたちが自分の取材のあり方に気づいていくという仕組みができる。また、このように具体的になるためにそのための指導も行いやすくなる。それだけでなく、成果の把握のためのワークシートは、その観点が盛り込まれたものとなり得る。それは結果的に子どもの様子を的確に把握し自分の単元を教師自らが振り返り改善することにつながるのである。

<p>課題設定の場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 町探検などの体験から自分の追究したい課題を持つ。 いくつかの課題の中から自分が追究したい課題を持つ。 東部のまちにかかわりもっと知りたいもっとかかわりたいという思いを持つ。 	<p>課題設定の力</p> <ul style="list-style-type: none"> 道探検を通して物・施設・事象・人などから不思議なことや疑問に感じることを見つける。 道探検で得た多くの情報の中から自分の関心のあることをはっきりさせる。 友達との情報交換から様々な疑問や見つけたことが他にもあることに気づく。 道にある物・施設・事象や人々の様子から知りたいことを明らかにしてさらに探検したり情報収集したりする。
<p>課題追究の場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の課題にあった追究方法を考え、解決に向けての見通しを持つ。 課題追究するために必要な情報手段を考える。 相手の立場や気持ちを考えて交流する。 メールやFAXなどのメディアを通して交流する。 進んで人とかかわりを広げる。 初めてのことや困難なことにも進んで取り組もうとする。 情報提供者に感謝の気持ちを持つ。 	<p>問題解決の力</p> <ul style="list-style-type: none"> 課題解決のための情報収集の方法について考える。 身近なところから情報を集める。 相手にきちんと挨拶して話を聞く。 相手の目を見て話を聞く。 相手の状況を考えて話を聞くことができる。 自分の聞きたいことが相手に伝わるように尋ねる。 インタビューを通して分かったことを友達と情報交換し多様な考えがあることに気づく。 インタビュー活動を通して集めた情報の中から東部のまちについての自分の考えを持つ。
<p>表現する場面</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の取り組みをわかりやすくまとめる。 相手にわかりやすく伝えるための表現方法を工夫する。 伝えることを通して相手を心を通わせようとする。 	<p>まとめて伝える力</p> <ul style="list-style-type: none"> 道探検で分かったこと・見つけたことをみんなの前で話す。 誰に何を伝えるのかを明確にする。 自分が伝えたい東部のまちの姿や地域の人々の気持ちについて確認する。 伝える相手によって換え字ことの効果を理解し表現に生かす。 大きな声で ゆっくり 字の大きさ・配列 立つ位置 視線・動作 紙面での表し方

自己への 振り返り 野場面で	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の取り組みを振り返って自分の良さや成長に気づく。 ・友達の取り組みの良さに気づいたりアドバイスしたりする。 ・自分の取り組みを振り返りよりよい自分になりたいという思いを持つ。 	自分を振り 返る力	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の見つけたことと自分とを比べ見直す。 ・友達のインタビューの仕方から良さを見つける。 ・自分の表現活動について話し方や紙面の表し方、演技の仕方を振り返る。 ・学習を振り返り、変化に気づく。
----------------------	--	--------------	--

表7. 1 平成13年度3学年の育てたい力から

平成14年度の3学年の育てたい力から

8 成果と課題

(1) 成果

- ・高学年においては教師が育てたい力を子どもと共有することで、子どもはその力を自ら付けようと活動の中で意識する。それが情報活用の実践力を向上させる。
- ・地域にはたらきかける体験的な学習の中で情報活用の実践力を育成することで子どもにとっては明確な課題を持った活動となり得る。
- ・育てたい力を学校として系統的に段階的に、かつ具体的に作成しておくことで経験の少ない教師も学習を展開しやすい。
- ・情報活用の実践力を具体的に段階的にする過程で、どのような指導や支援が適切なものが教師にとっては強く意識できる。
- ・児童の情報活用の実践力の向上は保護者の情報教育への関心と協力を高める。

(2) 課題

- ・同一中学校区での他の小学校や中学校との情報活用の実践力の向上を目指すユラムの効果的な接続を図る。
- ・情報活用の実践力という視点で総合的な学習の時間と各教科のカリキュラムを見直し、総合的に思考し判断する力をより育成するための効果的なカリキュラムを再編成する必要がある。

情報活用の実践力を向上させるための総合的な学習の時間と生活科におけるカリキュラムや評価については、まだまだスタートラインに立ったばかりである。本校ではワークシートやチェックリストを作成しているが、入力することで個人の評価や全体の評価ができるソフトまで開発されており、この領域の進化の早さを痛感している。今後も研鑽を積んでいきたいと考える。

さて、本校の学習環境などにおいては子どもたちが自らの目的を持って主体的利用することが可能な環境となった。これはひとえに研究助成のおかげであることをここに深く感謝申し上げたい。

協力者	静岡大学	情報学部	情報社会学科	助教授	堀田龍也	氏
	富山大学	教育学部	情報教育課程	助教授	黒田卓	氏
	富山大学	教育学部	情報教育課程	講師	高橋純	氏
実施場所	富山市立東部小学校					

参考資料	・21世紀のカリキュラムはこうなる	武村重和著	明治図書
	・総合カリキュラム 理論から評価	黒上晴夫監訳	日本文教出版
	・総合的な学習の新視点	今谷順重編著	黎明書房
	・教師と学校のインターネット	永野和男監修	オデッセウス
	・ポートフォリオで評価革命	鈴木敏恵著	学事出版
	・評価への羅針盤	黒上晴夫著	日本文教出版

資料

「総合的な学習の時間」チェックリスト

6 学年 「21 世紀、わたしたちの手で笑顔の輝く町へ」

「生活プロジェクト」 No.1 1

活動の評価	課題設定の場面で		課題追究する場面で											
	○市役所に案内した体から逆具を借り自分なりの願いを届けよう。	●町に住む人々に働きかけ、町の問題をもつ。とに働きかけ、自らに働きかけよう。	▼自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○活動をどう具体化していくか方法を考える。かかわる相手などを考える。	●同じような活動をするグループ内で、今後はわかり通す。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	●メディアを利用して意見に生かす。自分の意見交換を行い、自分の意見交換を行う。自分の意見交換を行う。	●自分の活動の目的を考え、必要な情報を集める。	●情報の活用方法を考えるから、情報を収集する。	●交流校や専門家などから得られた情報のよい点を活動に取り入れる。	○自分の考えの表現に向けて実践する。	○活動の中で、人ごのかわりを広げ、深める。	▼様々な人との双方向なかわりをつくることで、自分の意見をもつ。	▼情報提供者に感謝の気持ちをもつ。
1 A児		○市役所に案内した体から逆具を借り自分なりの願いを届けよう。	▼自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○活動をどう具体化していくか方法を考える。かかわる相手などを考える。	●同じような活動をするグループ内で、今後はわかり通す。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	●メディアを利用して意見に生かす。自分の意見交換を行い、自分の意見交換を行う。	●自分の活動の目的を考え、必要な情報を集める。	●情報の活用方法を考えるから、情報を収集する。	●交流校や専門家などから得られた情報のよい点を活動に取り入れる。	○自分の考えの表現に向けて実践する。	○活動の中で、人ごのかわりを広げ、深める。	▼様々な人との双方向なかわりをつくることで、自分の意見をもつ。	▼情報提供者に感謝の気持ちをもつ。
2 B児 (2学期から3学期) クラスへ参加			▲自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○公園の思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○活動をどう具体化していくか方法を考える。かかわる相手などを考える。	●同じような活動をするグループ内で、今後はわかり通す。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	●メディアを利用して意見に生かす。自分の意見交換を行い、自分の意見交換を行う。	●自分の活動の目的を考え、必要な情報を集める。	●情報の活用方法を考えるから、情報を収集する。	●交流校や専門家などから得られた情報のよい点を活動に取り入れる。	○自分の考えの表現に向けて実践する。	○活動の中で、人ごのかわりを広げ、深める。	▼様々な人との双方向なかわりをつくることで、自分の意見をもつ。	▼情報提供者に感謝の気持ちをもつ。
3 C児 ・本町の公園 →水車		○市役所に案内した体から逆具を借り自分なりの願いを届けよう。	▲自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○公園の思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○活動をどう具体化していくか方法を考える。かかわる相手などを考える。	●同じような活動をするグループ内で、今後はわかり通す。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	●メディアを利用して意見に生かす。自分の意見交換を行い、自分の意見交換を行う。	●自分の活動の目的を考え、必要な情報を集める。	●情報の活用方法を考えるから、情報を収集する。	●交流校や専門家などから得られた情報のよい点を活動に取り入れる。	○自分の考えの表現に向けて実践する。	○活動の中で、人ごのかわりを広げ、深める。	▼様々な人との双方向なかわりをつくることで、自分の意見をもつ。	▼情報提供者に感謝の気持ちをもつ。
4 D児 ヤコ		○市役所に案内した体から逆具を借り自分なりの願いを届けよう。	▲自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○公園の思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○活動をどう具体化していくか方法を考える。かかわる相手などを考える。	●同じような活動をするグループ内で、今後はわかり通す。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	●メディアを利用して意見に生かす。自分の意見交換を行い、自分の意見交換を行う。	●自分の活動の目的を考え、必要な情報を集める。	●情報の活用方法を考えるから、情報を収集する。	●交流校や専門家などから得られた情報のよい点を活動に取り入れる。	○自分の考えの表現に向けて実践する。	○活動の中で、人ごのかわりを広げ、深める。	▼様々な人との双方向なかわりをつくることで、自分の意見をもつ。	▼情報提供者に感謝の気持ちをもつ。
5 E児		○市役所に案内した体から逆具を借り自分なりの願いを届けよう。	▲自分の町に思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○公園の思いをもつ。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	○活動をどう具体化していくか方法を考える。かかわる相手などを考える。	●同じような活動をするグループ内で、今後はわかり通す。とに働きかけ、町に住む人々に働きかけよう。	●メディアを利用して意見に生かす。自分の意見交換を行い、自分の意見交換を行う。	●自分の活動の目的を考え、必要な情報を集める。	●情報の活用方法を考えるから、情報を収集する。	●交流校や専門家などから得られた情報のよい点を活動に取り入れる。	○自分の考えの表現に向けて実践する。	○活動の中で、人ごのかわりを広げ、深める。	▼様々な人との双方向なかわりをつくることで、自分の意見をもつ。	▼情報提供者に感謝の気持ちをもつ。

資料 1 20 時間後のチェックリスト

単元開始 20時間

資料

「総合的な学習の時間」チェックリスト

6 学年「21 世紀、わたしたちの手で笑顔の輝く町へ」

「生き物プロジェクト No.1」

活動の計画	課題設定の場面で	課題追究する場面で	▼情報提供者に感謝の気持ちをもつ。
1 A 児	●市役所に公園の遊具を提出したところから園の園い町を提 ●分題「住む人々から得た働き」をもち、公園の遊具を提出したところから園の園い町を提	○自分の園い町から、具体的な内容を決める。具体的な内容を決める。 ○活動をどう具体化しているか、方法を考える。かかわる相手などについて知る。かかわる相手などについて知る。	▼様々な人との平方間的なかわりをつくることで、自分の園い町を提
2 B 児 (2学期から3学期) 「ゾラへ参加」	●市役所に公園の遊具を提出したところから園の園い町を提 ●分題「住む人々から得た働き」をもち、公園の遊具を提出したところから園の園い町を提	○自分の園い町から、具体的な内容を決める。具体的な内容を決める。 ○活動をどう具体化しているか、方法を考える。かかわる相手などについて知る。かかわる相手などについて知る。	▼様々な人との平方間的なかわりをつくることで、自分の園い町を提
3 C 児 本町の住む町 →外単	●市役所に公園の遊具を提出したところから園の園い町を提 ●分題「住む人々から得た働き」をもち、公園の遊具を提出したところから園の園い町を提	○自分の園い町から、具体的な内容を決める。具体的な内容を決める。 ○活動をどう具体化しているか、方法を考える。かかわる相手などについて知る。かかわる相手などについて知る。	▼様々な人との平方間的なかわりをつくることで、自分の園い町を提
4 D 児 ヤコ、ゾラ	●市役所に公園の遊具を提出したところから園の園い町を提 ●分題「住む人々から得た働き」をもち、公園の遊具を提出したところから園の園い町を提	○自分の園い町から、具体的な内容を決める。具体的な内容を決める。 ○活動をどう具体化しているか、方法を考える。かかわる相手などについて知る。かかわる相手などについて知る。	▼様々な人との平方間的なかわりをつくることで、自分の園い町を提
5 E 児	●市役所に公園の遊具を提出したところから園の園い町を提 ●分題「住む人々から得た働き」をもち、公園の遊具を提出したところから園の園い町を提	○自分の園い町から、具体的な内容を決める。具体的な内容を決める。 ○活動をどう具体化しているか、方法を考える。かかわる相手などについて知る。かかわる相手などについて知る。	▼様々な人との平方間的なかわりをつくることで、自分の園い町を提

単元開始5分説明